

世田谷区基本構想審議会第3部会（第3回）

会議録

平成24年5月30日

世 田 谷 区

世田谷区基本構想審議会第3部会（第3回） 会議録

【日 時】 平成24年5月30日（水） 午後6時～午後8時

【場 所】 世田谷産業プラザ 会議室

【出席者】

■ 委 員 大橋謙策（部会長）、森田明美（副部会長）、坂東眞理子、大森猛、
宮田春美、上野章子、宮本恭子、風間ゆたか

小林正美（第2部会）、永井ふみ（第2部会） 以上10名

■ 区 小田桐政策企画課長、澤谷財政課長、田中政策研究担当課長、
吉田政策経営部副参事

【会議公開可否】 公開

【傍聴人】 8人

【会議次第】 議 題

- 1 第3部会の検討テーマについて
- 2 その他

【配付資料】 1 第3部会の検討テーマについて

参考資料

- 1 「世田谷区の人口の推移と将来推計」（第1回基本構想審議会資料）
- 2 「世田谷区中期財政見通し（平成24年度～28年度）」「第2回基本構想審議会資料」
- 3 「区の主要な収入源の税収、特別交付金の減少」（第1回基本構想審議会資料）
- 4 「世田谷区の予算 主な項目別推移（平成元年度～平成24年度）」
（第2回基本構想審議会資料）
- 5 「世田谷区民の平均寿命と65歳健康寿命」（基本構想審議会第3部会第3回資料）
- 6 「世田谷区における自殺に関する統計」（第1回基本構想審議会）
- 7 「世田谷区の家族類型別世帯数の推移予測」（基本構想審議会第1部会第1回資料）
- 8 「年齢階層別の人口の推移」（第1回基本構想審議会資料）

午後6時開会

（事務局・田中政策研究担当課長）

- ◆ お待たせ致しました。定刻を過ぎましたので、基本構想審議会の第3部会第3回を開催させていただきたいと思っております。よろしくお願ひ致します。なお、本日は田中委員から欠席というご連絡をいただいております。また、宮本委員は遅れるというご連絡をいただいております。また、第3部会の委員のほかにも第2部会から小林委員と永井委員がご出席でございますので、よろしくお願ひ致します。
- ◆ それでは議論に入ります前に私のほうから資料の確認をさせていただきたいと思っております。本日お配りしている資料ですが、まず一番上に次第がございます。それから、その次に資料1、第3部会の検討テーマについて、というA3の資料がございます。それ以降は参考資料ということで、適宜議論の途中でご参考として見ていただければと思っております。いずれもこれまでの第3部会や審議会等でお出ししたものの再度の掲載でございます。参考1「世田谷区の人口の推移と将来推計」、参考2「世田谷区中期財政見通し」、参考3「区の主要な収入源の税収、特別交付金の減少」、参考4「世田谷区の予算 主な項目別推移」、参考5「世田谷区民の平均寿命と65歳健康寿命」、参考6「世田谷区における自殺に関する統計」、参考7「世田谷区の家族類型別世帯数の推移予測」、参考8「年齢階層別の人口の推移」でございます。もし、足りないもの等ございましたらご連絡いただければ、事務局が参りますのでよろしくお願ひします。では、部会長、進行をよろしくお願ひします。

（大橋部会長）

- ◆ それではあらためまして、こんばんは。お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。また、傍聴の方々もお忙しい中を傍聴に駆けつけていただきまして、ありがとうございます。それでは第3部会を開催させていただきたいと思っております。前回は、委員からもご指摘をいただきましたけれども、20年後ということを論議するに致しまして、第3部会の分野は様々な計画が法律の上でも求められて作られておりますので、それらの現状分析をきちんと共通確認しておくことが必要だろうということでもさせていただきました。
- ◆ やや事務局の説明が長くて、委員の方々の意見を十分に反映させることができなく、申し訳なく思いました。従いまして、今日はフリー・トーキングで、委員自体が20年後の世田谷区をどう考えるかということも論議させていただきたいと思っております。ただ、それではあまりにも幅広すぎますので、この第3部会にかかることで、従来、どういうことが論議をされたのかについて、少し整理を事務局にお願ひを致しました。文言やタイトルのつけ方については、意見があるかと思いますが、それにこだわらずに、その項目に掲げられている内容を念頭に置きながらご論議をいただければありがたいというふうに思っております。それでは事務局のほうから資料の説明をお願ひしたいと思います。

（事務局・田中政策研究担当課長）

- ◆ はい。それでは私のほうから、資料1「第3部会の検討テーマについて」という資料についてご説明をさせていただきます。ただいま部会長からもお話がありましたように、部会で論ずるべきテーマ等を議論していただく上でのヒントとしていただきたいと思います。と思ひまして、部会長、副会長とも相談の上、作成した資料でございます。主な論点として一番大きく括ったところですが、そのところにこれまでの議論で出た主なご意見を少しまとめてございます。
- ◆ まず、担い手、市民性の養成(役割分担)と括ったところでございますけれども、例えばどのような人たちが地域づくりの支え手になるのか、どのように育てるのか、また地域とはどのような範囲を指すものなのか、というようなご議論があったかと思ひます。これは例えば第1回部会で、地域の担い手育成と、これは大森委員からですけど、民生委員区域を最小単位とする地域の考え方というようなご意見があり、また学校教育と市民性の育成であるとか、地域運営学校による世田谷っ子の育成とか、地域で育った子どもが地域の中で活動するために、というようなご意見もあったかと思ひますので、そうしたものをある程度括り、このように書いております。それから2番目、区民、本人および家族、事業者、地域、行政が解決すべきことの役割分担はどのようにあるべきか。3番目として、人生百年時代のライフスタイルのあり方をどのように考えるか。これは元気な高齢者の方たちの場をどのようにするか、ということもありましたし、子育てとライフサイクルの視点からのご指摘もあったかと思ひます。それから4つ目の、誰もが地域で暮らせる社会システムをどのように作るかについては、これは第3部会のテーマはこうしたことではないかというようなご意見があったかと思ひております。
- ◆ それから2番目に権利擁護(災害弱者の視点)として、括らせていただいたところですが、これは例えばDVや虐待の防止など、権利擁護のためどのように取り組むのかといったご意見や、首都直下型地震に対する減災、復興、街づくりを考えることで、子ども、若者、女性、高齢者や障害者、外国人等が安心して暮らせる地域づくりが進められるのではないかというようなご意見があったかと思ひております。これは事務局のほうで整理したものですので、議論の参考にしていただければと思ひます。
- ◆ その下ですけれども、部会で共有した今後の検討課題というものもでございます。これは前回、特に各所管からの報告などを受けた議論で、課題として認識しておくこと、また考慮すべきことというような意味で、出たことをいくつか拾ってございます。例えば、望ましい人口規模と人口構成、それから健康寿命が延びていない状況をどう考えるか、それから家族機能、家族構成の変化、少子高齢化、それから支援が必要な人たちへの対応、財政状況を考慮した政策の優先順位、自殺について、社会制度の変化の取り込み方というようなことが出ました。
- ◆ それからその下ですけども、他分野との共通課題というようなもので、出たものをべ

ースとしていくつか拾わせていただいております。多世代が交流して支え合う新たな住宅政策、在住外国人の支援のあり方、それから誰もが移動しやすい街づくり、交流の進む街づくり、貧困への対応というようなことがありました。

- ◆ それから一番下の第2回第3部会資料課題のマトリックスによる共通課題というのは、前回、高齢者、障害者、保健医療、子ども教育、男女共同といった6分野のご説明をさせていただいたところでございますけれども、そうした説明をまとめるものとしてお出ししたマトリックスの中で、各分野に共通するものとして、いくつか括られた課題があったかと思えます。そうしたものを星印であげたキーワード、職場、学校、地域社会、環境、家庭等、それぞれの生活の場ごとに少しまとめて言葉を拾ってあるものが一番下の四角の中でございます。
- ◆ 以上、色々、言葉を並べた資料にはなってございますけれども、ご議論の参考としていただくためのヒントとなればというふうに思っておりますので、よろしく願い致します。事務局からは以上でございます。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。それではご自由にこれからご論議、ご意見をいただきたいと思いますが、今日いただいた意見を少し整理させていただいて、次回、第4回、第5回と続けて、その整理をした柱に則して深める作業をさせていただきたいと思っていますから、今日はやや全般にかかわる、20年後の第3部会にかかわっての課題はなにかということで自由なご論議をいただきたいということが趣旨になります。どうぞよろしくお願いをしたいと思います。どうぞ、どなたでも。

（坂東委員）

- ◆ 前回欠席致しましたことと自由に発言していいということに力づけていただいて、日頃から思っていることをお話させていただきたいと思えます。20年後ということになりますと2030年ごろですが、おそらく中高齢化がますます進む。それから国際化がもう生活レベルでどんどん進んでくる。そして公的な財政は非常に余裕がなくなってくる。これらはもうはっきり見えていると思えます。その中でどういうふうに地域づくりを進めるかと申しますと、私自身がもうすでにその域に達しているからですけれども、林住期の生き方を世田谷モデルとして、ぜひ打ち出したいなと思っております。
- ◆ 林住期と申しますのは、学生期、これからの人生の準備をする、学習をする時期と、それから家住期、仕事や家庭で全力投球をする時期を生きて、もう少しそこから離れて、コミュニティ、周りに貢献をするという生き方をする時期、そして本当の最後の最後は遊学期だと思えますが、現在の今の日本では家住期が終わった人たちがいきなり遊期になってしまって、自分だけ健康で楽しく過ごしていればよいのだと。地域のために役に立とう、他の方たちを助けよう、といったライフスタイルがまだ確立していないように思えます。ぜひ、そのスタイルを作り出す、創出するということが必

要じゃないかと思います。

- ◆ 健康寿命の話がございますけれども、大変心強いのは、20年前に比べて今の75歳の人の体力は、その20年前の65歳の人たちの体力に相当するそうです。歩く速度、自分で階段が昇り降りできるかとか、外出できるかとか、買い物ができるかとか、もちろん男女差もあって、家事ができるかとかということになると少し変わり、個人差はもちろんありますけれども、70代の方たちは十分自立して活動する方が圧倒的に多い。65～75歳で要介護は1.2%、要支援は3.0%ですから、ひっくり返しますと96%の方が介護も支援もとらあえずは、もちろんあったほうがいいんですけども、とりあえずは必要ないという元気な方が今、どんどん増えていらっしゃいます。
- ◆ しかも、東京大学の高齢社会支援機構の方等もおっしゃっておりますけれども、使えば使うほど機能は高まる、使わなければ使わないほど、それは衰えていく。「今日用（キョウヨウ）」と「今日行（キョウイク）」が必要だと。今日は用があるとか、今日は行くところがあるという、「今日用」、「今日行」のある高齢者は元気である。何もすることがなくて、家に閉じこもって悠悠自適、趣味にいそしもうという人たちはどんどん衰えていきます。
- ◆ ですから、世田谷区として、ぜひ「今日行」と「今日用」のある高齢者を作りましょうというのが、私の提案です。用がなければいけない、それから行くところがなければいけないというのは、ブラブラしに行くところではなくて、私はやはり次の世代を助ける、育てる、そういった分野に1つ大きな可能性があると思います。これが、もう少し地方のほうへ行きますと環境保全とか、農業、あるいは林業の保全とかってところで、やるべき仕事がたくさんありますが、世田谷区からそういうところへ出掛けていくバスを出してもいいかもしれません。とりあえず、一番必要とされるのは、次の世代への支援です。おそらく20年後は女性が働くのが当たり前になります。もう特別な話ではなくなります。そのときにももちろん保育所も整備、保育園も子ども園になっているでしょうね。整備されるでしょうけれども、施設だけではなしに、例えば病気になったときに、例えば夜中、夜も含めてサポートする人たち、社会の祖父母、社会的祖父母、血がつながってなくても、色々な絆を持っている人たちが次世代の保育に関わるというのが1つです。
- ◆ 2つ目は教育にかかわることです。ご存じのように日本人の中学生、高校生は本当に勉強しません。なぜ勉強しないかという、もう落ちこぼれている子がかなりいるからです。そういう子たちに個別指導をするというのは、学校教育の先生方にとっては大変負担になると思いますし、今は多くの区民は塾、学習塾ですとか、プライベートな場で学力を補う、伸ばすということをやっておりますけど、これからの日本の若い両親はそれだけの支出、負担ができない方が増えてくると思います。
- ◆ 例えば学童保育が今SAPIXと協力して、月に6万円ぐらいでしたっけね、そういったようなサービスが出ようとしていますけれども、そういうのを購入できる人は本当に限られていると思います。SAPIXほどでないにしても、もう少し親切にきめ

細かく子どもたちの学習支援をする60代、70代の方たちがいていいのではないかと、ぜひひいるべきだと思います。逆に一芸に達している人とか、自分に得意な分野を持ってらっしゃる方たちが、その可能性のある中学生、高校生の指導をなさるといったことが必要ではないかと思っています。

- ◆ 例えば、今度学習指導要領が変わり中学校の授業に武道が取り入れられることになって、中学校の体育の先生たちが柔道を教わるなどと報道されていますけど、なぜ、地域に有段者がたくさんいらっしゃるのに、そういう方たちに指導してもらえないんだろうか。また、英語にしましても、外国から帰ってこられた方が、世田谷区にはたくさんいらっしゃいます。おそらく免許はお持ちでないでしょう。でも、力のある人たちが多いのですから、そういうような方たちがJETプログラムで外国の青年たちがやっているようにアシスタントなどの形で教育に関わるなど、世田谷区は、もっとみんなで力をあわせて、そういう方たちが子どもの保育や教育にかかわっていく。おそらくそれは非行防止にもつながると思います。そういった仕組みを作るといったことがとても大事になりますし、それが結果的には、先ほど申しましたように高齢者の方たちが社会に参加すればするほど、ご本人たちにとってもメリットがあるということ、ぜひ強調したいと思います。
- ◆ それから国際化で言いますと、在住外国人への支援のあり方なんていうのは、これはもう過去のいい方で、20年先はむしろ在住外国人の方に支援していただく時代になるのではないかなと思います。働き盛りの人はむしろ外国人の方が増えて、これは元から住んでいる人たちが高齢化して、そういう方たちに介護を担っていただく分野も出てくるのではないかなと思います。
- ◆ それから、世田谷区の場合は、それほど、空き家は増えないかもしれませんが、それでも子どものない方たちが、例えば有料老人ホームに入られる、あるいは亡くなられるときに、その不動産をどのようにするのかというのは、新しい課題として生まれてくるのではないかなと思います。
- ◆ 亡くなられる方が多くなるというと、ちょっと良くないかもしれませんが、公共的な目的に死後自分の資産を活用したいという方が増えてくると思います。それを、ぜひ、どういうふうな形で活用するかというスキームを作って、地域を豊かにするための資産として活用できるような仕組みを作っていただくといいなと思います。
- ◆ その中の1つとして、例えば、昭和女子大学もその1つですけれども、世田谷区は大学がたくさんありますよね。大学あるというのは、若い人たちがたくさんこの街をウロウロしているというのは、本当は大変な資産なんですね。ただ、その人たちが、今、大変家賃が高いので地方からの人は今、私立大学でも減っており、長距離通学をしている関東近辺が増えています。1時間半は普通で、2時間、2時間半というような通学をしている子どもたちを見ていると、もう少し家賃が安ければこの区域に住めるのにと、思います。例えば、こういう子たちを多世代居住型の公営住宅の中に位置づける。あるいは先ほどの空き家の守り番でもいいですけども、そういう仕組みが何か

工夫していただけるといいなということをいろいろとりとめもなく考えております。

（大橋部会長）

- ◆ どうもありがとうございました。最後に部会長としていろいろまとめなくてはならない責務がありますので、忘れてしまわないよう思いつくままに少し整理をさせていただきます。今、坂東委員が言われたことはとても大事なことで、1つは住宅政策ならびに産業構造が急激に変化しないとした場合に20年後の人口構成がどうなるかということを考えてときに、世田谷区は他の区に比べて、後期高齢者が非常に多いということになります。団塊の世代もそのまま20年後住むとすれば、世田谷区の後期高齢者は多い。従って、後期高齢者の生活にかかわる課題、あるいは文化をどういうふうこれから考えていくかが、1つ大きな柱になってくると思っています。その場合に1つ、今、坂東委員も言われましたけど、相続のあり方というものが問われてくるように思います。
- ◆ それから2つ目には、死に方支援。死に方支援のソーシャルワークっていうことをしきりに、最近、私どもが問題にしておりますが、死後の世界じゃなくて、最後の何か月間、1年なりをどういうふう健やかに死に向かって支援できるかということ。もちろん、それはエンディングノートの使い方とか、いろいろありますけれども、そういうことが2つ目の問題としてあります。林住期の文化を世田谷区でどう作れるか。たぶん全国で見ても、世田谷区はそれなりの役割を担っているのかもしれない。
- ◆ それから、どうしても高齢者というと、支援される側の立場だというふうに思いがちですが、世田谷区は生涯現役ネットワークと言っているわけですし、こういう生涯現役ネットワークだとか、シルバー人材センターのあり方をたぶん全面的に見直しをしないといけないのではないか。20年後は相当インターネットを使える高齢者が出てくるわけですから、今のシルバー人材センターの業務以上に変わってくるだろうと思うわけで、生涯現役の考え方、あるいはシルバー人材センターのあり方を、1つ柱として考えなくてはいけない。
- ◆ それからもう一つは人口が大幅に変わらないとして、全国的には過疎化が進むわけですから、いろいろなところで市民農園を、市町村の中だけじゃなくて、外部に持つということも出てきているわけですし、グリーン・ツーリズムだとか、1つの動きでございますが、例えば岩手県の遠野市なんていうのは、滞在交流型人口を増やすということを言っています。別荘地ではなくて、1カ月間ぐらい滞在をしてもらい、旅行も当然ですけども、絵を描くとか、陶芸をすとか、いろいろなことを行い楽しんでもらうという町おこしを20年前から問題提起しています。世田谷区の中の自己完結的な発想ではなくて、世田谷区が逆に過疎地のところと提携をして滞在交流型の活動をしていくことが考えられるのではないかということは今、坂東委員の話聞いておまして、整理をさせていただきました。たぶん、これは第3部会の大きな課題になってくるか思います。他にはどうでしょうか。

（森田副部長）

- ◆ 私は常々、子ども、子育て家庭の問題を政策的にどういうふうに取り組んでいくのかということについて議論しているわけですが、20年後ということになりますと、もちろん、今、ちょうど生まれた子どもたちが成人し、20歳ぐらいになっていくということですし、今回意識的に20年後を語るような世代がちょうど40歳ぐらいになってきて、おそらく世田谷の中心的なメンバーになっていく時代になるわけです。
- ◆ 20年というのは、世代が1つ変わるときという気がします。ですので、私たちが次の世代、次の時代に一体どういう社会を託そうとしているのかということ、私たちは責任を持って議論しなくてはならないと思っています。
- ◆ 特にそのときに、財源の問題は社会的な環境をどう整備するのかということで非常に重要ですが、それ以上にやっぱり環境が重要だと思います。財源の問題はある程度自分で工夫することが可能ですが、この自然環境、あるいはさまざまな社会環境もそうですが、こういったものは自分の力で、あまり変えることができないものであるわけですね。
- ◆ 私は以前苦情審査会の委員をさせていただいたときにも、私が今の年代で見ると、ちょうど子育て世代の方たちが、例えば保育園を利用するときに大きな道路を、世田谷には多数の大きな道路がありますので、その大道路を渡って保育園に連れていくということはもう絶対にしたくないということで、入所をめぐって渡らないですむところに保育園を作れないかという苦情があがってきたことがありました。それを聞いたときに、私たちは自転車に子どもを乗せて20分でも30分でも必死になって子どもを送っていくということをやしてきてきたけれども、実はもうその価値観が変わってきており、それがいいとか悪いとかということではなく、それが事実だとするならば、そこに向けて私たちはどういう議論を組み立てて、どういう整理をしていけばいいのかってということも議論しなきゃいけない。つまり次の世代というのが、どういう価値観の中でこの世田谷に暮らし、そしてこの中で暮らしやすさ、あるいは子育てのしやすさみたいなものの中で、また次の世代を育ててくださるのか。こういったことも、私たちが考えなきゃいけないことだと感じております。
- ◆ 特にこういった道路、あるいは自然環境、こういった問題はなかなか私たちの力ではできない問題であるだけに、ぜひ、これは第1部会のほうかもしれませんが、こういったところにも発言をしていきたい。子どもを育てる、あるいは子どもが育つという環境の中では最も重要で、そしてなおかつ私たちの個人的な力ではなかなかできないところ、こういったものについては最重要課題として考えていただきたいということを思っております。

（大橋部長）

- ◆ 今の問題は誰もが地域で暮らせる社会システムをどう作るかということで、第3部会

の最も大事なことです。他分野との共通という意味では、多世代が交流し支え合う新たな住宅政策と、いわば生活圏域の設定ということがあるのだらうと思います。生活圏域ごとに多世代が交流できるような住宅、社会サービスの整備をどう考えるかということをございまして、これは子どもだけではなく、高齢者の場合も同様です。地域包括支援センターなどで道路が渡れないで利用者が減ってしまうことはよくあるわけですから、そういう意味では生活圏域と、住宅政策と多世代交流等をどうつなげていくかというのが1つの問題かもしれません。

- ◆ それから今、子どもの問題が出ましたから、あえて言いますと先ほどの坂東委員の問題にもつながりますが、今日、私、竹下通りを用事があって通り抜けたのですが、外国人の方、とりわけ黒人の方がすごく多い。みんな、客引きというか、キャッチセールスというか、なんと言うのでしょうか、されていて、ここ3年ぐらいだと思いますが、こんなに変わったのかと思いました。私は港区で総合計画の委員となりましたが、そのときの在住外国人はほとんど白人ですね。豊島区の場合には、ほとんど中国、韓国です。世田谷区で在住外国人というのは、どこの国の方々が来るのかといったことを考えないといけないし、世田谷区のどこに滞留されるのか、江戸川区だったら、もうインド人の方なんです。だから、抽象的に、一般的に在住外国人と言っているとは思えないと思います。
- ◆ 20年後は、たぶん在住外国人の方が多数いると思いますが、それは大人で来て、帰るのではなく、その方が結婚して子どもを育てるんで、20年後には保育園と学校に在住外国人の方がたくさんいます。今、埼玉県で私が審議会の会長をやっているときに大きな問題になったのが、ブラジル、ペルーの方々の子どもが学校不登校になっていて、その方が大きくなって結婚して事実上孫が保育園などに来ている。だから、親は日本語が分からないという状況なんです。それから山梨などでは、子どもは日本語ができるけれども、母親が全く日本語ができず、母親の鬱の問題等が出てきている。ですから在住外国人がずっと単身でいるわけではなく、結婚されるだらうと思います。結婚されたときの子どもをどうするか。それが保育園、学校に行くということを、ぜひ20年後は考えておかなければならないということをございます。
- ◆ イギリスが1989年にチルドレンアクトとして子どもに関する法律を統合しましたが、そのときの状況では、1世帯、1家族の中に4カ国語の子どもたちの世帯が増加している。結婚し、離婚し、再婚し、また一緒になったら1世帯の中に4カ国語で虐待が起きてしまう。それはもうコミュニケーションができない。20年後は、日本はそこまでいくのか。だから、子どもは日本の一般の子どもではなく、そういうところまで諸外国で起きているわけですから、そうしたことを具体的にイメージしながら、保育園、小学校でどういう外国語ができる先生を確保できるのかを、学校や教育委員会が考えないと、埼玉やイギリスと同じような問題が起きる。
- ◆ 20年後というのは、こういうことの想定なのだらうと思います。もうすでに埼玉とか、山梨では起きているということは、ぜひ頭に入れておいていただきたい。他にはいか

がでしょう。

（大森委員）

- ◆ 民生委員の大森として、お話ししたいと思います。現場の話になりますが、安全、安心を国も都道府県も区市町村も、これをモットーに活動されるは、非常にすばらしいことと考えます。しかし、この安全、安心が、少し変わりつつあると思われます。2月に、渋谷駅の改札口付近で60歳と見られる女性が70歳位の女に刃物で背中をさされました。5月に、同じように渋谷の地下鉄構内で車内のもめごとから、行きずりの男にサバイバルナイフにて刺された事件がありました。護身用のナイフを、安全、安心の自らの解釈でカバンの中に持っていたということです。如何ものかと思われる事件です。
- ◆ 私どもは現場にいると安全、安心ということで、活動しているわけですが、これからは、考え方を考えていかなくてはならないのかなと思っています。
- ◆ また、東日本大震災から、皆さんがご存じの「絆」とかいう言葉を、盛んに使われていますが、現在では「おたがいさま運動」と称して、進化しています。これは、平成の時代ではなく、昭和の時代に戻りつつあると考えても良いのかなと思われます。私は「高齢者の見守りネットワーク」と称するものを手がけていますけれども、向こう三軒両隣の昭和の時代におけるご近所づきあいが必要であると考えています。20年後について、これらを考えると、複雑化している今の世に、ストレスがたまる人が増えてきたように思えるし、先ほど申し上げた、安全、安心を自分勝手な解釈のもとに護身用のナイフを持ち歩くということは、ここらについて、改めて考えるべきことなのかと思っています。
- ◆ これからも、私どもの現場において、福祉に関する地域活動をするには、そのストレスの溜まったなかに、民生委員が入っていかなくてはならないと考えると、委員そのものにもストレスが溜まります。双方の、心の問題等を考えていかなくてはならないものと判断します。
- ◆ 民生委員の会長は、平成18年5月より地域人権啓発リーダーを承り、21世紀は「人権の世紀」といわれる中で、人権活動も始めました。諸々を考えますと、人権擁護委員の活動する時期に来たのかなと感じています。この人権という言葉在世田谷の区においては、大きく取り上げて頂きたいと思ひます。これからは、人と人の触れ合いの中で特に必要になることではなからうかと思っています。一人の担い手として民生委員がそこにいるのかと考えます。また、世田谷区に於いては、人権擁護委員の定数規定がありまして、84万区民に対して、36名の人権擁護委員が必要です。しかしながら、世田谷区においては現在20名の委員にてまかっています。只今は、これで十分まかなえるかと言えばまかなえるような状況ですが、この規定数を維持して行けば良いか、20年後を思い、委員数を考え直さねばならない時が来ると判断します。これからますます増える区民たちのストレスに対し、心のケア等含めて、民生委員、人権擁護委員、

そして、人権擁護サポーター等を設置して、福祉活動の領域に幅広く携わるがボランティアの存在が必要と考え、発言しました。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。今の問題は例えば委嘱ボランティア、行政が住民の方に委嘱していろんな活動をやってもらい、それをボランティアという言葉が使えるかどうかは別として、分かりやすく言えば委嘱ボランティア。民生委員が全国23万人いる。それから保護司が5万人いる。今言った人権擁護委員がいる。こういうのをずっと世田谷区で、かつては東京都独自の青少年委員もいたわけですが、そういう制度がどうなっているかを整理し、必要があれば世田谷区があらためて地域づくりをするときに委嘱ボランティア制度を作るといことは大事な問題かもしれません。
- ◆ 国のほうは、内閣府は、もう地域主権の時代だから民生委員は厚生労働大臣の委嘱ではなく、都道府県知事か市町村長でいいのではないかといった発想もしておりますが、事柄はそう単純ではないので、今のようなことも整理しながら世田谷区が地域づくりなり、地域の安全、安心な生活を守るための委嘱ボランティアみたいな制度を、どう作っていくか。これは一朝一夕ではできないわけですから、やっぱり20年後を目指して大森委員が言われるようなことを考えておく必要があるのかもしれない。
- ◆ 他の自治体では住民の方にそういうことをお願いすればするほど、行政職員がすごくきめ細かく地域を担当する職員制度を持っている。だから、地域担当制を行政にも置く、住民の方々にもそういう方を置くということをしかけないと、ただ住民の方にお願ひしますといっても、なかなかやれないだろうというのが、たぶん大森委員が一番言いたかったことだろうというふうに斟酌しましたけれど、それでよろしゅうございましょうか。

（大森委員）

- ◆ はい。ありがとうございます。

（小林委員）

- ◆ 私は第1部会から第3部会まで、今まで全部出席を、皆勤の人もおられますけど、それで今日の議論はかなり他の部会でも横串的に話しあわれていることがありまして少しご紹介したいのですけれども、例えば第2部会では、やはり高齢者から子どもまで多世代が本当に楽しく住める街を作ろうということが1つ大きなテーマになっていまして、そのために職住近接という世田谷の、大きな都市ではなくて世田谷の中に、今まで核家族の集積でしかなかったようなところをもう少し、震災後ですね、コミュニティを見直して、コミュニティを再生していこうと。こちらで言っている地域を育てる社会システム、あるいはコミュニティっていうのは共通に考えている問題意識になっています。

- ◆ 今後予測される災害に備えて、先ほどの向こう三軒両隣のように、いわば下町的なそういう地域で誰もがどこに子どもがいて、どういう人を助けなきゃいけないということを常に意識できているような環境をすぐにでも作って備えないと、次の災害に太刀打ちできないだろう。例えば、この前のシンポジウムがありまして、松任谷正隆氏が隣の人がどんな人か、全く顔も知らないっていう、私たちが似たようなところに住んでいますけれども、地域の人が写真を配って自己紹介したシートを配ったりしないかというアイデアが出ていましたが、それは決して冗談ではなくて、ほとんどの人はみんな本当に知らないんですよ。知られるとかえってセキュリティ上危ないと思うところも出てきているので、今部会長が言われた通り、やっぱり世田谷こそは本当にその地域で、先ほど坂東委員が言われたように地域の人的サービス、高齢者だとか、いろんなことを知っている人たちがちゃんと子どもたちに継承をして、教えていけるような、地域学びの場というか、街が学校というか、そういう大きなテーマがあるような気がします。
- ◆ 先週あった第1部会では、他の区の基本構想などを全部調べて、みんな似たようなありきたりな言葉なので、世田谷区は世田谷独自の世田谷らしい言葉を選ばなきゃいけないだろうということで、子どもが輝ける街というのが1つ出まして、それは安心、安全というと非常に堅い防犯になってしまうので、例えば羽根木プレーパークのように、子どもが本当に輝いて伸び伸びとできる。世田谷で育った子はいまひとつ違う伸びやかさがあるみたいな、そういうことはすごく大事だろうと。
- ◆ それから今まで世田谷が守ってきた景観ではなくて、風景ですね。自然を含んだ街並みとか、風景というのも、マンション開発なんかで壊さないで、できるだけ屋敷林などを残した、そういう風景をいかに継承していくかも、世田谷らしい1つの考え方で、やはり住んでいる人たちはお互いに助け合いながら誇れる街を作りましょうという議論が、他の部会ではあります。
- ◆ 前回、小学校がコアになるべきだというときに、小学校の教員の人事権が区になくて都にあると。それもこの前の部会で話したら、世田谷区だけで決めてもいけないので、多少は他の区と相談しながら、しかし東京都の言いなりでやるのではなくて、それと先ほどの、アシスタント的な教員というか。ですから、これはかなり教育のところ踏み込んだ議論になりますが、地域のボランティアなり、能力を持った高齢者、あるいは再び働きたい婦人がたくさんいる、そういう人たちが空き家を高齢者と若者がシェアするようなシェアハウス、あるいはコミュニティハウス、あるいは子育て支援に改造して、そこで、ソーシャルデザインというか、ご婦人もちゃんと社会にもう1回コミットできるような、そういう意味での職住近接、街が子どもを育てる、高齢者が、それまでの歴史を子どもたちに継承する。それが世田谷らしいんじゃないかという意見が出ました。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。今のことで言いますと、例えば徳島県の旧海部町、今は合併して海陽町になりましたけど、旧海部町は学校の中に県の教育委員会で採用された教員と町が採用した教員がいます。町で採用された教員は学級担任を持たない。地域との関係、学校外の指導をする。これが非常に成功したわけです。この発想を構造改革特区で小泉内閣のときにやったわけですが、それと同じことを世田谷区はやったらいいじゃないかということ、考えることもできます。
- ◆ 前回も言いましたが、世田谷教育プランの中にほとんど地域教育っていう発想がありません。社会教育もありません。だから、旧海部町のような実践だとか、あるいは東京都の生涯学習審議会が第三の教育行政、地域教育行政と言っているわけですね。もう学校で全てをとというのは無理があり、学校の負担を減らして、学区ごとに地域教育行政で、そのリーダー、指導員は地域のおじさんでも学生だったっていいじゃないかという、これはもう1970年のときに渋谷の教育委員会が取り上げました。全員特別公務員にする。夏休み中の指導員は教育委員会が直接採用した特別公務員がやる。そういう発想があったので、世田谷区がやる気があれば、全国的にはできているということですね。決して目新しいことじゃない。そういうシステムをどう作るかということじゃないでしょうか。
- ◆ 学校は20年後どうなっているのだろうか。在住外国人の問題も含めて相当変わっていかないと、今の学校制度の延長で論議していると見えてこない。前回そういう話をさせてもらいました。

（宮田委員）

- ◆ 今、学校の話がちょうど出ましたので、世田谷区立小学校PTA連合協議会の23年度の会長をさせていただきました宮田です。私は今、主に公立のほうになりますけれど、学校のほうもビジョン、世田谷教育ビジョン第3期行動計画、冊子で出ていますけれど、学校のほうでも教育委員会のほうでも掲げているのが、世界に羽ばたく子どもたち、未来を担う人材を育てようとか、人格の形成、それから、一番言われているのは、地域とともに子どもを育てようということで、現場では様々な取り組みが行われています。
- ◆ 世界に羽ばたく子どもたちという中では、世界に目を向けた子どもの教育ということで、実際に小学校で外国語の授業、英語を話せるようにとかそういうのではなく、世界を知ろうという授業も行われています。小学校は昨年度、中学校のほうも今年度から本格的に学習指導要領が変わっています。地域性から言うと、柔道のお話が最初に出ましたが、日本体育大学、国士舘大学等から、支援というか、実際に教育の現場で指導という取り組みも行われていますので。日本体育大学は小学校の連合運動会に審判とかに来てくださってまして、子どもたちに触れ合ったりしているとかもあります。地域とともに子どもを育てようということで、学校のほうも地域性ということで力を入れています。

- ◆ 学校運営委員会というコミュニティスクール。今、全国でやっていますけれど、世田谷区はかなりこれに力を入れていまして、もう6年前からやっているところもありますけれど、来年25年度には全学校にコミュニティスクールを設置するというので、もう始まっております。そういった中で、小学校の子どもたちも昔の授業とはまた違った形で地域の方から、いろいろな、例えば金融について学ぶ。難しいものではなく、身近なことを題材にしたお金に関することや、税金のこととか、そういったことを実際に子どもに考えさせて社会に結びつけた授業などもしております。そういったことで子どもたち、20年後の子どもたちがそういった授業を受けてどういうふうに羽ばたいていくかという中で、どのように高齢者の方とか、地域の方とか、そこに関わっていけるかっていうことも重要になってくるのかなと、お話を聞いていて思いました。
- ◆ 地域づくり、街づくりという中で、地域がもう先にあって、それが個々にいくのか、個々があって、個々から初めて街づくりというふうになるのか、と皆さんのお話を聞いて、私のほうで考えました。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。世田谷の教育委員会は、一応課の名称は生涯学習・地域・学校連携課になっています。名称はそうです。だから問題はそれに肉づけをして、魂をきちんと確認していくことが必要かもしれませんね。だから、抽象的なことはたぶんみんな同じように思っているけど、どういうシステムで具体的にどういうことを考えるのということを言わないと抽象的な論議をやっている、もうみんなそうだっていう話だと思います。もう少し具体的なイメージなり、具体的なシステムが湧くような形で基本理念を語るというようなことなのだろうと思います。

（永井ふみ委員）

- ◆ 私も理念っぽいことしか語れないので、詳しいことはちょっと聞かせていただきたいなと思う部分があります。地域で子育てしている者の1人として、地域で子どもをみんな育てるっていうのは、親としてもとってもほっとするなと思います。地域のおじいちゃん、おばあちゃん世代みたいな方が、とても親しくしていただいて、子どもの様子とかを聞いてくださったり、まだ風邪なのかとか、元気になったかといった会話があるだけでも、実際にその子どもを見てもらうところまでいなくても、とても安心感があるなと思います。
- ◆ そういう日常的な接点づくりが最初にとっても大切なのかなと日々感じています。その中で、以前、大橋先生が前々回の部会で富山方式というのをおっしゃったのを、もう少しここで詳しくお伺いしたいと思います。ちらっと見たところでは坂東委員がおっしゃった空き家の活用と、そこを多世代の交流源にするというところで、この部会でのお話が総合的に昇華されていく部分があるのかなと思いました。
- ◆ 世田谷では地域共生の家等の取り組みがすでにあって、もう芽が出ている部分がある

と思いますが、もうひと息、地域で支えるシステムというところで、富山方式に学ぶところがあるのかなというところをお伺いしたいなと思います。

- ◆ あと小学校区というのが、生活をしていると生活圏、交流の単位として、身近だな、リアルだなと感じていますが、そのあたり、ぜひほかの方のご意見も伺いたいなと思います。

（坂東委員）

- ◆ 私は富山県出身で富山方式は詳しいのですが、「このゆびと一まれ」を始めておりますが、高齢者の福祉と保育を同じ施設でやることによってお互いが支えられるんですね。だから、かなり認知症が進んでいる方でも、子どもの世話はできる。子どもの世話をすることで刺激を受けて進行が遅くなるとか、いろいろな形でお互いが支え合えるような場を作るということが重要です。
- ◆ そういったようなことは本当にこれからもぜひ世田谷区でやっていかなければいけないことだと思いますが、あともう一つ、子どもの関係で私が問題意識を持っておりますのは、少子化が進んでいる中で、子どもたちはどの家庭にとってもまさに子宝なんですね。もう至れり尽くせり世話をされて、大学生になっても親にお弁当を作ってもらっているような子どももいっぱいいます。ですから、本当に丁寧に、丁寧に育てられています。もう小学生高学年、中学生、高校生は世話をされる側だけの役割だけではなしに、世話をする側に立つ、課題に取り組む、そうした経験をもっとさせなければいけないのに、もっぱら教えられ、保護され、守られというような育てられ方をしていたら、これからの日本の20年後はひ弱な人たちがばかりになってしまうだろうと予測できます。
- ◆ いわゆる知識としての学力だけではなしに、現実っていうのは本当に正解が1つとは限らない。協力をして、いかに課題に立ち向かっていくかっていう経験をさせなければなりません。その経験をする場が今の日本の都会の子どもたち、都会だけではありませんが、非常に乏しくなっておりますので、そうした現実の課題に取り組むためにも、地域がぜひ、先ほどの委嘱ボランティアじゃないですけど、委嘱教育ボランティアがそれぞれの課題を持って小学校区で、「このゆびと一まれ」でやってみるということが必要なのではないかなと思います。
- ◆ 赤ちゃんの世話をする中学生があつていいわけですし、認知症の方のお世話をする小学生がいていいわけですよ。もっともっとそういった場を作り出さなければ、ひとりで子どもたちは分かるだろうと思っただけではいけない。やっぱり、そういうふうな仕組みづくりっていうことが必要だなと思います。
- ◆ ちょっと話が横道にそれますが、食育、バランスの取れた食事を取りましようといったことがとても言われておりますけれども、これ、新潟県の新発田市で、私はとても感動したのですが、そこの食育が、食の循環、堆肥づくりまでやって育てる、収穫をする、調理をする、後始末をする、全部関われるようになりましようというこ

とで、具体的には小学校に入る前に女の子も男の子もご飯が炊ける、それから女の子も男の子も小学校を卒業するまでに自分のお弁当を作ることができる、中学校を卒業するまでに家族の夕食の用意をすることができるということを実行しておられます。コンビニで買ってきてではなしに、自分で食材を調理して後始末までする、本当の食の能力を持った子どもたちを育てる地域ぐるみの活動をしていらっしゃると思って、とても感心したのですが、ぜひ子どもたち、教育のことを考えるときに、与えるだけではなくて、子どもたちに何かをさせるというようなプロジェクトに、ぜひ取り組ませ、それが結果的に、現実の課題に立ち向かう力を持った社会人を育てることにもつながるのではないかなと思います。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。富山の場合は構造改革特区でやって、それが今、一般化したわけですね。だから、問題は自治体が主体的にこういうことをやりたいって提案をして風穴を開けていくしかないので、問題はそれだけだと思います。
- ◆ それから、もう一つは例えば1970年代のときに補助金は別々でしたけども、東京の稲城市というところは公民館と老人福祉センターと児童館を合築しました。もう1974年のときからやっているわけです。監査の度に議論をし、それを守ってきたわけですから、要は縦割り行政をこの機会になくすぞという発想をやれば、事柄はかなり変わるのではないかと思います。世田谷区は縦割りの的なのを、ずいぶんよくやっていますよ。しかし、縦割りの的です。問題はそこをどう新しいシステムに変えるかというところが1つのポイントではないでしょうか。

（永井ふみ委員）

- ◆ すごく坂東先生のお話に共感したので、もう少しお話しさせていただきたいなと思ったのですが、子育てをされていて、すごく大事なことで自主性を育てることだなと感じました。それは、実は世田谷に引っ越してきて、とてもいい保育園にめぐまれたからです。その保育園では本当に少人数で、例えば1学年は6人ぐらいしかなくて、3、4、5で1つのグループとして教育をいただいています。
- ◆ そこでは学芸会って、「じゃ、みんなで歌をうたいましょうか」っていうのではなくて、プログラムを先生たちが子どもたちを集めて「みんな、何をやりたい」、「お父さん、お母さんに何を見てもらいたい」っていうところから始めて、もう2カ月ぐらい企画から、あと製作に至るまで全て子どもたちの考えを引き出す形でまとめあげていただいているような、それは一例ですけども、とてもいい教育をいただいています。
- ◆ それを見ていると今後の少子化の社会における小学校の教育などを考えると、ご意見にもクラス替えがないのはちょっとどうかというようなお話もあったと思いますが、その分一人一人の自主性を引き出せる時間があったり先生の目が配られるでは

ないかと思ったりしました。そのときにオランダの事例などもテレビで紹介されていて、いろんな小学校の特性があって、どこの小学校へ行きたいかを子どもたちが決める。時間割はなく、子どもたちが自分たちで考えるという例があると聞いたことがあります。これからの社会では、私たちみんなで切り開いていかないといけないことが非常に多いので、そのときに一番大切なものは自主性だと思います。

- ◆ この基本構想においても、区民の役割が非常に書き込まれる、位置づけられることが重要だと私は申し上げましたが、それも本当に私たちが自主的でなければ、これからを担う子どもたちが自主的でなければ、意味がないことですので、ぜひそういう教育を世田谷で充実させていただきたいと思っています。

（大橋部会長）

- ◆ たぶん、これは基本構想の1つのポイントになることでしょう。自主性とか、主体性だとか、住民自身がやっぱり自覚する。自覚して学習していただく。そういうものがないとまずいのだろうと思います。健康寿命にしても、全てそうだと思います。例えばデイサービス。これ、ユニバーサルデザインって書いてありますが、実はデイサービスになんでもかんでもしてもらおうとかえって駄目で、夢のみずうみ村という山口県の実践がありますが、もうバリアーだらけですよ。毎日自分が行って、今日は何をやりたいか、自分でプログラムを作るんですよ。その自分が作ったプログラムをワーカーたちが支援してくれる。
- ◆ だから、今のオランダの話ではないけれども、学校もそういうことが必要なんです。私も1975年ごろ、幼稚園の副園長をやっていて、教員の作ったカリキュラムじゃなくて、子どもたちがこういうことをやりたいという、そういうことをやっていかないと、やっぱり自主性というのは育たない。ある日突然あなた主体的にやりなさいなんて言ったって、できっこないわけで、そこはたぶん世田谷の人づくりにおいて、ポイントじゃないでしょうか。これは関係者がよっぽど意識を変えないと、どうしてもプログラムを作ってやらせたほうが楽ですから。これは本当に教育能力が問われることだろうと思いますが、大事なことです。

（上野委員）

- ◆ この間、第1部会ですか、何回でしたっけ、世田谷のブランド力の話がありました。今、世田谷区の公立の小学校で私立を受ける、受験するお子さんが40%、すごく多いという話を聞きました。現実問題として、小学校も、のほほんとしているとは言いませんけども、やっぱりある程度のブランド力をつけていかないと、子どもも、今、小学校は確か地域である程度学校を選べますよね。私の周りでは越境入学をちょっとしている方がいらっしゃいますが、越境入学は駄目できないのでしょうか。

（宮田委員）

- ◆ 全部じゃないですけど、駄目というところも。

（風間委員）

- ◆ 実際はできています。

（上野委員）

- ◆ 同じ区立の小学校でも、Aっていう小学校は中学の受験率が高くて、いい学校に入れているとか、地域性もありますでしょうけども、その学校の周りの、商業地区にある小学校とまた違うし、子どもたちの性格も多少違うでしょうし、住宅街の小学校の子どもたちも、やっぱり違うと思います。
- ◆ この間もその話をしたときに、公立でも学校、学校のある程度特性を出していただいたり、子どもたちの個性をよく見極められるような、要するに学級体制、人数が多いとか、極端に少ないとかではなく、バランスの取れた教育の仕方をしていただくというのが、私は世田谷の小学校の理想だと思います。
- ◆ 私は、実は子どもはもう中学は当然のことながらというか、私立に行かせたんですけども、それがいい悪いはともかくとして、子どもたちはとっても喜んでいる、もう今は社会人になりましたけれども。区立の中学校に行った子どもたちでも、ずっと地域の社会性を身につけることはすごく大事なことでと思います。だから、その辺のところをうまく加味していただいて、やっぱり学校自体をちょっとブランド化していただいたり、特殊性を出していただいたりとか、できたらいいのではないかと思います。

（風間委員）

- ◆ 今のお話、すごく共感するところがあって、教育は今回の大きなテーマだと思いますので、あとで触れますが、この前、第2部会するときも言いましたが、今日も配られていましたけれど、世田谷区の財政、お金が少なく、税収が足りなくなっていますよねというのが配られていると思います。いずれこれは上がっていくという見方もありますけれども、それほど楽観視できないなっていう見方も当然ある中で20年後を考えると言ったときに、どなたかこの前おっしゃっていましたが、もう今日からずっと続いていくこと、今の世田谷区政の延長上にあるというふうに考えたときに、これからお金が増えてくればラッキーですけども、横ばい、もしくはなくなっていくと考えたときに、区政として何を優先的にやらなくてはならないのかを打ち出していくのが、今回のこの基本構想は、重要だろうなど、何度も言っていますけど、やはり思います。
- ◆ この前、第2部会するときにも言いましたが、そうなったときにまさにこの第3部会の領域である福祉の領域は、命を守るという意味でも最優先だと思いますし、またはこれからの日本社会の一番投資しなければいけない部分は、やっぱり人に対してだと思います。資源の少ない国で。となると、やはり子育て、教育の領域には、世田谷区は

これまでも力を入れてきたことですし、そこを最優先する、福祉または教育を最優先にしてゆくということを、きちんと宣言していくことが、最も重要なことではないかと思いました。ですので、部会長にはこれから各部会の意見を統合する際に、そこは譲れないぐらいのことを言っていって頂きたいなと思います。

- ◆ そのほかにも、緑や集合住宅など、いろいろなアイデアも出てきていると思いますけれども、例えば明治大学グラウンドの跡地の例が顕著ですが、もはや大きな場所が出てきたときに世田谷区で買えません。税金を出してまで、そういったものを新たに作る余力が現段階ではないということを考えたときに、そういったことも理想としてはあり、どこかからのお金でできるのであれば、もちろんやっていけばいいことですが、そういう意味でも優先順位をはっきりさせていくことが重要だなと思います。
- ◆ 何を使えるかといったときに、皆さんからもいろいろお話が出てきましたけれども、世田谷区は、ソーシャルキャピタルの宝庫というか、1つには大学がたくさんあることもそうですし、様々な経験をしてきている引退された先輩方が住んでいるというのもそうですし、まだまだ世田谷区、それを活用しきれていない。NPOの数で言っても、全国の市区町村で言えば群を抜いて多いというような状況も活用しきれていないという状況がありますから、こういったソーシャルキャピタルをもっともっと活用して、いいものを作っていくということを打ち出していくもの、やっぱり世田谷ブランドだと思うし、世田谷ならではののではないかなと思っています。
- ◆ 各論に入って教育というお話がありましたけれども、今年の1年生で、世田谷区立小学校に入らなかった比率が14%。10%程度だったものが、すでに小学校で、上がっているわけですね。私は息子が小学校1年生、区立へ行きましたけれども、なぜかなと思って私立とかに行った同世代の保護者から聞いていると、特に小規模校の子たちというのは公立を避けています。先ほどの、越境できる、できないというのもありますけれども、うまく制度を使って越境している人もいるし、できない人もいるというところで、越境できないのであれば、もう私立に行こうと、お金を持っている人たちは、そういう考え方をする人も結構います。
- ◆ 何が必要かという、均質化が非常に重要で、世田谷区の場合には学校ごとに特色を持つと言っていますが、特色を持ったとしても選べないという状況ですから、そこが小規模校の地域に住んでいた場合に6年間ずっと20人程度のクラスでいさせたくないという親が多数います。何を議論する必要があるかと言えば、きちんと統廃合の話をしていかなければならないのに、統廃合できない。なぜかと言えば、それは地域の象徴だからです、みたいな話が出てきたりすると、誰のための学校だという話になる。そこはきちんと世田谷の学校は均質化していくこと、統廃合も含めて、先生の質という意味では、全般的に東京都の中でも世田谷区の先生方は優秀だという話をあちらこちらから聞きますので、あとはそうした箱の問題だろうなと思います。
- ◆ もう一つ、世田谷の強みというか、先ほど命、投資の部分で言ったら子育てと学校教育というところだと思いますし、先ほどの永井委員からのお話もあったように、保育

園も内容面も含めてかなり頑張っている地域だと思います。もう一つ、世田谷区、高齢者で命を守るとか、先ほど健康の問題などの話がありましたが、世田谷区の生涯現役の取り組みは全国的にもかなりリーダーシップを取っていると聞きますし、そういったことに積極的な高齢者もかなりいらっしゃるというか、世田谷区もだいぶまき込みがうまくできてきていると感じていますので、ここのところは、例えば区として基本構想で打ち出していくのであれば、より多くの人たちがいつまでも健康でいられる世田谷区というようなことなのかもしれませんし、そういった人たちが例えば学校に関わっていくとか、自分でいろんなものに関わっていくことによって生涯現役でいつづけられる世田谷区ですというような打ち出しをしていくことが重要ではないかと思えます。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。世田谷区、財政が厳しいと言いますが、私はいろいろな自治体のアドバイザーをやっていますが、他の自治体に比べれば、非常に状況はよい。しかし、それに安住するわけにはいかない。例えば緑の分野にはトラストがあります。このトラスト、先ほど相続税の話をしましたけど、やっぱり世田谷の資産価値があるわけですから、面倒を見なかった子どもたちに相続させないで、社会的に還元していただくというふうな、住民運動というか、理念を打ち出すことはあっているのではないかと思います。イギリスのように社会に還元するというのをやったらどうか、公益信託の仕方をもっと少し明確にこういう分野でほしいと。
- ◆ 例えば、私もついこの間、自分のNPOでやりましたが、机や椅子が足りないときに、この机は誰が寄付したとか、この椅子は誰が寄付したとかとラベルを張って意識化すると寄付が増える。それはイギリスがやっていることで、このベンチはこの地域を愛した誰々さんの寄付ですというような取り組みを丁寧に行っていくことによって、資源がまわるわけでございます。
- ◆ この間、高齢化率40%の人口5万の市で65歳以上の高齢者が持っている預貯金5,000億円です。1人3,000万円ですよ。問題はこれをどう地域に還元していただくかです。世田谷区でも同じようなことを考えないといけないのかもしれない。右肩上がりでない中で、あるものを活用して、地域に還元していただく。本当に相続の問題とか、公益信託の問題は、財政との問題もからめて、すごく大事だと思います。
- ◆ それから、このトラスト分野だと学生インターシップがあるわけですから、こういうのをもっと横に広げればいいわけですし、あちこちアイデアはあります。それをトータルに論議できる仕組みができていないというところが問題だということだろうと思います。ですから、NPOをどんどん作っていただいて、そこを公益信託で、こういうNPOでお金を寄付してくれる人っていうようなことをやれば、今もうインターネットの時代はやれます。
- ◆ 東日本大震災と阪神淡路大震災の違いはインターネットを使って目的を明確にして寄

付を集めたときに、みんな集まったということです。国際的にはその方向でいくしかないわけで、こういう子育てをしたいNPOです、ついては寄付いただきたい、備品をいただきたいということです。それを行政のセクションのどこがやりますかっていうことです。縦割りでは限界があり、社会システムを作り直すことをやらないとうまくいかない。

（小林委員）

- ◆ それを認定NPOで減税措置すればいいんですよね。

（大橋部会長）

- ◆ 制度が変わって認定NPOでずいぶん基準が低くなりましたからいいですけども、そういうことをもっと教えて、それぞれ支援する。NPO推進課みたいな課があるけれども、問題はどういうふうにまわすかということではないでしょうか。

（風間委員）

- ◆ NPO、世田谷はいっぱいありますが、認定NPOになりきれないところが多く、そのところまで、まさに具体的な支援を打ち出して支援していくっていうことになったら、育っていくと思います。ぜひ、そこは入れてもらえればと思います。

（坂東委員）

- ◆ 資産を寄付されても、自分たちが維持してゆくことは、役所にとっては、面倒なんですよ。トラブルが起こる可能性もあれば、修理の費用の負担の問題もある。だからお金にして寄付してください。でも、それでは、せつかく寄付しても残らないわけですよ。それは、抵抗を持ちますから、せつかくの善意を顕彰してくれるような仕組みを作る。例えばその名前をつけてくれた地域福祉施設になると、ちょっとうれしいわけですよ。ぜひ、そういうふうな形で、善意を目に見える形で、活かすことを応援することが、行政の仕事ではないかなと思います。
- ◆ 私も長いこと公務員をしていたからよく分かりますが、法律や規則は多数あります。そのため、断ろう、やらせないでおこうと思えばいくらでも規則や法律はあります。でも、行政の仕事は、特に地方行政の仕事は、この法律、この規則はあるけれど、どうしてそこをかいくぐって何かできないかと工夫することが仕事です。法律があるからできません、規則があるから無理ですと言っていたら、それは折角のソーシャルキャピタルを押さえつけるのが行政かということになってしまいますので、ぜひ、支える仕事を世田谷区はやっていただきたいと思う。やりたいことをできるようなことを工夫するのが行政の仕事だと思います。

（大橋部会長）

- ◆ ちょっと定かじゃないですけど、世田谷区は寄付が年間6億円ぐらいあるんですけど。日本の一番弱いところは寄付の文化がないんですね。やっとなんか二十数年前から寄付の文化って言い続けて、今、寄付の文化っていう言葉を使ってくれるようになりましたけど、やっぱり命名権など、何に使ったか分かるようなこと。これを考えたら、私は、世田谷はお金もあると思いますので、1つの新しい社会システムづくりとしてそういうことをやりませんかということですよ。

（森田副部長）

- ◆ 今の問題に絡めて、世田谷は空き家がある、あるいは空きスペースがあると言いながら、実はNPOが活動しようとするときにスペースがないんですね。何か事業を始めようとしても、結局この高い家賃の中でお金を払って、活動するだけの力がないNPOが多い。だから、いわゆる小さな企業を興す人たちが小さな机と椅子と電話ぐらいを用意して下さる場所ができるように、そういうNPOが活動するときに、自由に使っている場所っていうものを、もっとそれぞれの地域にたくさん用意していくことが必要だろうと思います。
- ◆ それが先ほどお話があった空き家であればもっといいし、そこを若者たちが使えばもっと生き生きとさまざまな活動ができる。そうするときに、問題になってくるのが、具体的には世田谷の中で言えば、財産を担当の部署と事業を担当する部署、そういったものが、やはり横串で活動を推進するという方向にいかなければならない。だから、こういうものを具体的には展開するような、そういった事業がほしいということが1つ。
- ◆ そして、それと絡んで、社会福祉の事業等に関わっていると、この世田谷区というものと23区行政と東京都行政と国の行政、具体的には社会福祉は国の事業があり、都の事業があり、23区の事業があるという、ここが教育とか、福祉には非常に多いわけです。そうすると、それぞれの部署が縦割りであると同時に、また、区やあるいは東京都という、事業のところでもどんどん縦割りが厳しくはめられていくことになる。
- ◆ この辺をどういうふうを超えるか。特に例えば先ほどの話ですと、私も青少協の中で私立学校に通っている子どもたちが、中学生だと半分ぐらいになっていく。そうすると、ちょうど小学校の高学年の例えばBOPの活動がありますけれども、BOPの活動をしている子どもたちがまさに塾に行っている子どもたちになるわけで、そうするとこの塾に行けない子どもたちがBOPに通うのかっていう話になってしまいます。
- ◆ そうすると、世田谷の中で子どもの行動パターンみたいなものの中から、もう1回事業点検をして、20年後ですが、まさに今の親たちっていうのは少子社会の中で育った子どもたちが次の親になっていく世代に入っていきますので、もっとそういう意味で言うとあまり子ども同士の交流がなかった、あるいは子育て家庭があまり交流しなくなった時代に子育てをやるような社会が、ここちょうど10年から20年の間はものすごく起きていく社会になっていきます。そうするとその時期に私たちが社会的に支

援をしないとすると、もう孤立度はもっと強まっていくだろうというふうに私は想像します。

- ◆ そんなわけで世田谷区というのが本当に23区や東京都との関係の中である種の決断と
いうのをしなくてはならないことがあるのではないかと、とても感じております。

（坂東委員）

- ◆ 繰り返しになりますけれども、物事を変えるのは個人です。個人が何かを始める。それがグループになる。それがグッドプラクティスになって、特区になり、全国に広がって行く時代に入ってきていると思います。昔のように霞が関が情報を持っていて、それが地方へ流れていくということでは、もう世の中は変わらなくなってきています。まず、現場が何かをする。そのときにいわゆる認定NPOをいきなり目指すのではなくて、まず個人から、その思いを持っていた人たちが行動を起こす。それを行政や周りが応援するような仕組み、押さえつけるのではなくに応援するような仕組みを作っていくことが、世田谷でやるべきことではないのかと思います。

（大橋部会長）

- ◆ これは第3部会もそうですけども、新しい社会システムを考えるときに分権化をどこまでやるのかっていう論議、地域をどう考えるのかっていう論議をやってきたわけで、84万で考えるのか、27で考えるのか、5ブロックで考えるのか、どこまで権限を下すのかということですよ。何回も言うようにですけど、福井、山梨、鳥取、島根より、世田谷は人口が多いというふうに考えると、あの県の中はみんな市町村で分権化しているわけで、世田谷は84万でいいというふうにはいかないわけですね。生活圈も全部違うわけですから。これは、第1部会かな、第2部会かな。それは本格的にやらないと、20年後はまさにそういうことだろうと思います。

（上野委員）

- ◆ シルバー事業団の話が、私もよく分からないのですが、60歳から70歳ぐらいの人たちの元気なお年よりをマンパワーとして使っていくというのが私はすごくいいと思うんですね。でも、そのシルバー事業団が今のポジションはどういう形で、どの位置にいて、60歳から元気な70歳ぐらいまでの方たちを行政のほうはどういう受け止め方をこれからしていくのかということを質問したいのですが。

（大橋部会長）

- ◆ シルバー人材センターは、もともとの始まりは高齢者福祉事業団というところから始まって、大河内一男先生を中心に作ったわけですが、当初は、所得の低い方々への支援、それがだんだん拡大されて健康づくりや仲間づくりに変わってきています。しかし、それは高齢者が働く場ということですけど、もう少し今日ではソーシャルエンタ

ープライズやコミュニティービジネスと呼ばれるような地域との関わりや、社会的に新しい企業を作っていくなど、そういうふうに変換しないと行かないだろうと、私個人は思っています。

- ◆ 今のシルバー人材センターがいいとか悪いという論議ではなく、その時期にきたのだろうと思います。単にシルバー人材センターの量的な拡大、充実だけでは弱いのではないかというふうなことで先ほど言ったわけですね。だから、障害を持っている人と元気な高齢者が一緒に新しいソーシャルエンタープライズを作るとか、あるいは生産緑地を使って、世田谷のコミュニティービジネスを作れないかとか、そういうことを考えないといけないわけです。
- ◆ 30年前から、生産緑地を障害を持った人に使わせてくれと言っていますが、堅くて駄目なんです。もうこれはどうしようもないですね。そういうことをやれば緑を残すことにもつながるし、高齢者が障害を持った人と一緒に働けるし、事情によっては地域行政みたいなのがあれば、子どもたちがそこでやるっていうこともあるわけです。この辺をどう考えるかだと思います。

（坂東委員）

- ◆ その関連で申しますとシルバー人材センターで紹介される仕事は、比較的肉体的な労働といえますか、お掃除や植木の手入れなどの仕事が多くて、いわゆる知的な経験を積んでいらっしゃる方たちが力を発揮するようなチャンスが十分ではない。ですから、それには人材に登録をしていらっしゃる方たちにどういう仕事をしてもらうか、仕事をつくりださねばならない。本当にエンタープレナーシップを持った方、起業家の方が必要ですが、そういう方が今の高齢者事業団からのシルバー人材センターにはいらっしゃらないのかなと感じます。
- ◆ また、収益をあげてはいけないため、低い賃金でお仕事をしていただいていることもあり、なかなか豊富な経験を持った方たちが入ってこられない。ですから、ある程度の収益をあげていいとして、いろんな能力を持っている方たちがどんどんいろいろな仕事、社会に役に立つような仕事が望ましい。その線引きをどうするか分かりませんが、仕事をしたい人は山ほどいるんですけども、それをどういう形で営業にするか、企業活動にむすびつけるかっていう部分が今、非常に貧しいですね。

（宮本委員）

- ◆ 私自身主婦で、人生経験が少ないので、自分で身の回りを見渡した中での感想ですが、今の子どもたちが20年後将来を背負っていく世代になるという中で、1つ危機感を覚えるのが、物事の関係性をつなげあわせる力、目に見えない部分をより自分のこととして捉える力が、どうも最近の子どもはなかなか点と点を線にする力が、昔と比べて落ちてきているような気がしています。例えば先ほどの在住外国人の件ですとか、問題意識を持ってもらうためには、小学生の生活を終えただけではおそらく他人事で終

わってしまうようなことばかりになるのではないかなと思うので、できればそれを、こういう問題があなたの周りには起こっていて、あなただったらどうしたいの、どう考えるとといったディスカッションの場をもっと積極的に子どもたちに与えて、当事者意識を持ってもらわないと、20年後背負ってもらえるような大人にはならないのではないかと思います。

- ◆ 他人が困っているけど、自分には関係ないという大人にはなってほしくない。そのためには、やはりいろんな世の中で起きていることをもっと卑近な例で自分に近寄せるようなアクションが今後もっと必要なのではないかなと感じています。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。昔のエジプト時代に「今の若い者は」というのがあったと言います。歴史的にいつもそう言っているのかもしれませんが、今の宮本委員の発言を聞いて、私が1970年の初めごろに書いた論文で「今の若者はチャンネル思考になった」と。テレビのチャンネルじゃないけど、チャンネルが合えば反応するけど、自分のチャンネルと違ったら全く反応しないという、これは大変な状況になったと言っていますけど、それがもっと進んで、もうデジタルしか反応しないということなのかもしれませんけれども。
- ◆ 私はもう日本は40年間、壮大な社会実験をしてしまったと思っています。だから、今に始まってけしからんというのは、今の大人が、私どもを含めて、問題だったと、私は思っています。子どもにとって、生きる力がそうですし、自殺の問題もそうですし、そのころ、私が書いた論文で「まあね」族と「さあ、別に」族、インタビューでいくら言っても、何を聞いても「まあね」、「別に」しか返ってこない。会話にならない。それが1970年の青年の調査で書いた論文ですけど、その青年たちがもうおじいちゃんやおばあちゃんになっているかもしれません。壮大な実験をしてしまったのだから、それを具体的にどういうふうに変えていくかを真剣に考えないと、20年後はもっと深刻で、点には反応するけど、デジタル的にはいいけどアナログにはならないみたくなるか。そうすると、国際的な競争力は、抽象的に国際に目を向けた輝く子と言っても、難しい時代かもしれない。
- ◆ ちょっと視点を変えてですけど、世田谷の清掃事業の中で、在住外国人の人たちのゴミ出しの問題でトラブルはありますか。例えば、山梨県の中央市は、ゴミ袋の収集にポルトガル語と中国語と日本語を表記しています。そのぐらいに、在住外国人の方々が増えてくると、もう一つ一つがそういうことになるわけですが、清掃は大丈夫でしょうか。というのは、高齢者も分別できなくなります。精神障害者や知的障害者の地域自立支援と言いますが、分別ができず、トラブルを起こしています。
- ◆ 在住外国人のことも豊島区では結構トラブルになりました。世田谷区はそういうことありませんか。つまり、われわれとしては、そういう具体的な生活場面で高齢者とか、障害を持った人、あるいは在住外国人がどんな不便をしていて、それが社会にとって

どういう弊害になっているのか、あるいは支援のあり方を考えなくてはならないのか、これらのことを考えて、そのシステムを作らないといけない。災害弱者については、抽象的な言葉だけ言っている、私は駄目だと思います。今日でなくてもよいのですが、そういったことは気になります。たぶん、アパートで学生たちはゴミ出しが問題となっていると思います。

（上野委員）

- ◆ 在日外国人で、黒人の方と、あとフィリピンの方が私の家の近所に住んでいて、小学校のほうで、その方たちをすごくよく受け入れているんですね。母親、もしくは父親を招いて、その国のことを聞いたりとか、日本の風習を教えたり、お料理教室をやったりとかをPTAで行っているんですね。そういうので交流を深めており、その点はうちの地域ではすごく上手にやっているなど、私も感心して見ていました。
- ◆ 遠くから持ってくるなどゴミ出しの問題は、確かにあります。ゴミに関しては、これはもうずっと、やっぱり学生の多い地域は当然のことながら、イラッとするときもあります。だからといって、今どき近所の嫌なおばさんになってゴミを全部出して、名前を見てそこの家の玄関まで持っていくみたいなことは、さすがにできませんから、それはもう清掃局あたりをお願いするしかないと思います。

（大橋部会長）

- ◆ 例えば長野県茅野市は、ゴミの分別が16分別です。徳島県の上勝町は32分別ですよ。だから、リサイクルとか、自然との共生とか、簡単に言うけれど、具体的にはゴミどうしますか、CO2をどうするというのなら本当にそれを還元させることを考えますか、そのときに日本人だって難しいのに在住外国人できますか。日本人の中でも障害を持っている人や高齢者は難しいですよ。私なんか、このままいけば濡れ落ち葉で、とても生活できない、生活能力のない年寄りになっていくのかもしれない。
- ◆ 本当に障害者のことを考えてくれましたか、高齢者のことを考えてくれましたか、元気な住民だけではありませんよということを、他の分野にちゃんとメッセージは出さなくちゃいけない。
- ◆ それから先ほどの小学校の話で、公立ではなく私立に行くといいますが、山梨県の小学校のPTAの確か2つが、PTA会長はブラジル人です。そういう時代になっているということですよ。山梨県の中央市ってどこだか、分かりますか。そういうところが、いくつかある市内の小学校の2つのPTA会長をブラジルの方がやっているという状況なのです。
- ◆ だから、公立、私立の問題ということは、具体的にはそういう話を想定しながら、教育のあり方、20年後を考えてくださいということだろうと思いますね。

（宮田委員）

- ◆ 世田谷区はいろんな国の方がいらっしやっていますので、PTA活動で、例えば会長ではなくても、会長も過去にはいらっしやったことがありますけど、副会長とか、そういう中で一緒に活動しています。学校で、先ほど上野委員が言ったように、外国の方を受け入れている公立の学校が世田谷区あります。そこはかなりコミュニケーションがとれています。

（上野委員）

- ◆ 目黒区で田道小学校という学校がありまして、そこはもう本当に半分までいかないけれども、多くの生徒が外国人です。なぜかというと、近くに自衛隊の幹部学校があり、その幹部学校に外国の方が10人ぐらいいらっしやいます。お子さんを連れて皆さんいらっしやるため、外国人のお子さんを公立の小学校に皆さん入れているんですね。コミュニケーションがうまくて、特に日本語がすごく早くうまくなるんですね。もう肌の色がみんな違いますし、言語も本当に違いますが、やっぱり田道小学校はそれを完璧に受け入れているんですね。
- ◆ だから、いろんな小学校や中学校に在日外国人の生徒が増加したとしても、これから英語教育も進んでいくようですし、そんなに危惧することは、私はあんまりないと思います。

（大橋部会長）

- ◆ 例えばスウェーデンの場合には、スウェーデン語と同時に、その出身の母国語を学校で教える。そういう教育方針をしたわけです。日本も20年後そこまで本当にやるのかは、財政の問題も含めて考えなくてはなりません。スウェーデンでは保育所から始めたわけです。子どもを育てるということは、手間暇がかかり、お金もかかります。それだけの共通理解になるかということですね。国際化は、こういうことですね。

（森田副部会長）

- ◆ 今ですね、小学校で子どもを育てると同時に実は親もそこでの暮らしを学んでいく、あるいは暮らしをサポートされていくという、そういうふうにとらえることができるのではと思います。私も世田谷の中で苦情審査など、いろんなことをさせていただいて、その中でとても感じたのは、各部署は一生懸命いろんな情報を文書化してできるだけ分かるように出そうとします。けれども、一定量の人には絶対に分からない人たちがいます。もちろん、それは障害があったり、病気があったり、あるいは言葉が違ったりというのは、まさにそうだと思います。
- ◆ そうしたときに、先ほど、大森委員がおっしゃっていた民生委員が、ひょっとしたら人権擁護委員みたいな役割もしなくてはならないかもしれない。あるいは、もうちょっと言うと、その人数がもっと増えていったら、例えばいろいろな社会的に、いわゆるマジョリティーの部分でなかなか情報を得られない人たちが、そういう人たちの力

を借りて、アドボカシーのような形で、援助を受けてられるような、そんな仕組みが地域にもっとくまなくあったら、それを具体的には、多少お金を出して仕事にして、この区内でお金が少しまわるようにするような仕組み、そんなことをしたら私たちが抱えている、例えば家庭にひきこもってしまう、あるいは仕事がなく、先ほどもかなり重要な仕事をしてこられた方が急に退職したことによって、もう場所がなくなってしまうというようなことも、新しい仕事を作り出すことによって、この世田谷区内がもっと過ごしやすくなっていく街になるのではないかと思います。

- ◆ だから、世田谷方式で、先ほどのお話ですけれども、富山方式でない世田谷方式でと、そして先ほども皆さんおっしゃっていましたが、世田谷って本当に市民活動でも、すごく子どもたちの冒険、遊び場なども作り出してきた街であったし、それから権利擁護の仕組みでも作り出した街であった。しかし、この84万人にするにはいかにせん少ないし、小さい。だから、1つできたことによって少し満足してしまう部分があって、これを84万人に広げるにはどうしたらいいかを、もうちょっと考えなくてはならない。
- ◆ そのときにお金や場所などの地域性みたいなものをもうちょっと考えた事業化ができないだろうかと常々思っていて、ぜひ、今日、大森委員がおっしゃったような、そういう活動を丁寧に1人ずつ伝えていくために、新しく作り出すことができないだろうかと思いました。

（大橋部会長）

- ◆ 時間が来ましたが、高齢者分野でいくと、サービス付き高齢者向け住宅というのが、国土交通省で作られるようになりました。それと関連して言いますと、世田谷区のこれから一人親家庭が増えるのか、子どもってというのは親が育てなくちゃいけないと思うのか、社会的養護と呼ばれるような仕組みを作らなくてはならないのか、親の支援と子どもを育てることをセットにした母子自立支援施設がありますが、これは所得が低いとか、そういう人たちの問題ですけれども、そうではなく、母子ともに自立支援する母子自立住宅や母子自立支援住宅という発想をするのか。つまり、住宅を作る側の方の人たちが住宅一般を考えているのか、サービス付き高齢者向け住宅や、母子自立、あるいは父子自立支援住宅であるとか、その辺まで考えないといけないところへ来るのだらうと思います。
- ◆ たぶん、今以上に離婚は増えていくのではないかと。先ほどイギリスの例で言いましたが、離婚、再婚を繰り返したら本当に複雑な家族になっていくのかもしれない。その辺の支援をどうしていくのかというようなことを頭に入れておいていただければありがたいなということでございます。

（坂東委員）

- ◆ 20年後にもう一つ忘れていけないのは、生涯未婚者、特に男性が増えます。男性の20%

前後、世田谷の場合はもう少しそれよりも高いかもしれませんが、僕はゴミ出しができないとか、栄養のバランスの取れた料理ができないとかっていう男性の生涯未婚者がどんどん増えていったら大変なことになると思います。そういう方たちが基本的な生活能力を身につけるということを今から心がけておかなければ大変なことになると思います。

- ◆ そういう生涯未婚の男性の多くが、親と暮らしていらっしやって親の介護をしていらっしやいます。生活能力が十分についてない人が自宅で頑張っていると、往々にして高齢者虐待をする。最大の加害者は実の息子なんですね。そういった悲劇を起こさないためにも、そうした未婚、あるいは単身の男性たちの生活能力向上の問題は、無視できないと思います。

（大橋部会長）

- ◆ そのためには家庭科を男女共修にしたのだけど、効果が上がっていないですね。

（宮田委員）

- ◆ すみません、最後に一言だけ。先ほど大橋部会長が言ったことにもつながりますが、子どもの教育に関して、ちょっと一言だけお伝えしたいと思います。子どもの教育というのは家庭が基盤にはなっていますが、家庭だけではなく、例えば学校であつたら先生、それから習い事の先生、それからスポーツを習っている人だったらそのコーチとか、本当に多くの大人の方に育てられ、守られていきます。ぜひ、地域の人材を生かした教育ということもありましたが、みんなで子ども育てていこうというような、そういった全体につながる、これは本当に漠然と大きなものですけど、そういったものにしていただけたらいいなと思っています。

（大橋部会長）

- ◆ ありがとうございます。今日は多数意見を出していただいてありがとうございます。冒頭に述べましたように、次回の4回と5回は今日出ましたものについて、少し柱建てを整理して、もう少し深めた形にすると同時に、その深めたものを今度は抽象的な理念として、どういうふうに打ち出すかも、考えておかなければならないと考えています。事務局は今、部会長で最後にそれを整理しろと言いましたが、永井委員が書いてくれただけで、あんなにたくさんあるのに、私の頭の中で全部はとてもできません。そのため、今日の議論を少し踏まえて、事務局で議事録が出てまいりますから、それをもとにして、あらためて部会長と副部会長の責任で柱建てを作りたいと考えています。それを早めに皆さん方にお送りしますので、次回のときはその柱建てに則して発言できるようにご準備をいただければありがたいです。そのため、今日は部会長としてのとりまとめは致しません。個々のところでやらせていただいたということで、皆さんが個別で言ってくれたことを少し抽象化して、課題的に整理するということで、

ずっと私なりにやってきたつもりでおりますので、それをもとにして次回論議をさせていただきたいと思っております。それでよろしゅうございましょうか。はい。ありがとうございました。

- ◆ それでは次回と、それから次々回の日程をお願いしたい。それからもう一つお諮りしたいのですが、最終的にはもう少し詰めますけれども、ちょっと皆さんの感触を聞きたいのは、子どもの意見を直接聞こうという話でございましたが、区長と子どもたちが8月に会合を持つそうです。そのときのテーマが、20年後の世田谷みたいなこと、われわれの20年後みたいな話になりそうだということです。それがあんならば、今の子どもはみんな忙しいので、あえて部会主催で再度集めるようなこともないのではないかという気持ちに傾いていますが、どうでしょうか。もう同じようなことであつたら、それに代わるということでもよろしゅうございましょうか。向こうがもう少し固まったら次回で報告できると思っておりますので、もし今、述べたようなことでやるのだとすれば、部会主催のものはしないということで、それに代えさせていただくということで進めたい。また中学生、高校生から個別にメール等で意見があればいただくというチャンネルは作りたいたと思っておりますけれども、何かシンポジウムの的にやることはしないという方向で検討させていただければと思います。そこだけは確認させてください。
- ◆ 次回と次々回の日程等を含めて事務局からよろしくお願い致します。

（事務局・田中政策研究担当課長）

- ◆ ありがとうございました。次回の日程は前回もお話がありましたように6月の29日金曜日の同じ時間ということでお願いしております。よろしくお願い致します。その次ですが、当初7月の下旬ごろを想定しておりましたけれども、先ほど部会長と副部会長の日程をお伺いしただけで、7月の下旬は全くできないということが分かりまして、現在お二人が合うのが8月8日です。もしよろしければそこでやらせていただければと思いますけれども、いかがでしょう。

（大橋部会長）

- ◆ よろしゅうございましょうか。6月29日の6時からと8月8日の6時からということで設定をさせていただければありがたいということでございますが、よろしゅうございましょうか。はい。それでは、そういうことで準備をさせていただきたいと思っておりますが、よろしくお願い致します。それでは今日はこれでおしまいにしたいと思います。どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。

午後8時閉会